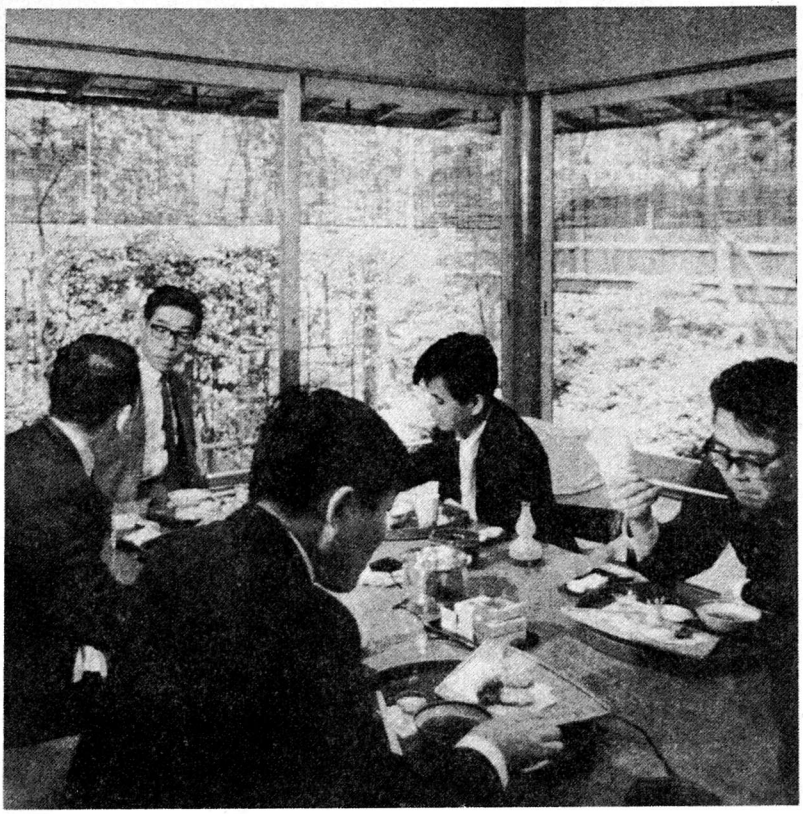
座談会

巨大都市は崩壊する？

都市文明と二〇年後のビジョン



都市と農村とは人間定住の二つのタイプであった。しかし今後二十年間は都市人口を八〇％以上とする。このような状態にあっては、都市はもはや従来の都市という言葉と同じ呼び方をするのは正確でないかもしれない。農村もまた従来の農村とは全く異ったものになるだろう。そのような変貌に我々は耐えうるのであろうか。ここではそのような新しい人間定住空間の変化の問題を気楽に語ってもらった。

（編集部）

□出席者（発言順）□

司会・	環境開発センター社長	浅田　孝
	ハーバード大学助教授	槇　文彦
	環境開発センター計画部長	田村　明
	日本国土開発研究所常務理事	田村喜照
	建築評論家	川添　登

I　都市化のあり方

日本の都市人口は昭和四十年において六千六百万人で全人口の六八・一パーセントを占めているが、二十年後の昭和六十年には、九千百万人と全人口の八割が都市に集中すると推定される。このような急速な都市化現象は、世界共通の現象ではあるが、また日本社会独特のものをもっている。その中でどのような都市を考えてゆくべきであろうか。

槇　ぼくは都市というのは二十才から五十五才くらいの壮年のための機能を中心にする地域社会だと思うのです。もう少し社会が豊かになってくると、余裕が出てきて、都市にいる必要がなくなったときはいなくても済む社会でもあるというふうな傾向がでてくるのじゃないだろうか。それなのに、日本の場合は、必要がなくてもまちにいなければならないという状態ではないかと思うのです。一般には将来都市に人口の八〇％が集まるということの内容があまり吟味されないで、地域社会のビジョンが打ち出されているというのも、相当問題ですね。

浅田　いまの日本では前近代的な家族制度が残っていて、若いものがそれを都合のよいところだけ利用しているという面がある。だが若いものをそういうところへ追い込んでいったのは、

ートに住むという現状であって、都市は壮年二世代家族が住んだら、当然学校も要る。学校の敷地はかりに二ヘクタールもの間都市で働いて一応社会生活を終わったというふうな人で、老人ホーム

エフ10号 1966.9

浅田　孝氏

日本社会独特のものだ。だから資本主義先進諸国での都市化現象とはかなり区別して理解しなければいけない点が多々ある。それを全部抜きにしてパタナイズしてエコノミストは論じているわけだ。そこに非常に問題がある。また、それに切り込んでいくときの体系化された武器がない。

都市は壮年層のために

槇　ぼくの問題にしているのは、一人の人間が一生生活できるような構造ではいまの都市社会の形成や集中現象が起っていないだろうという実感があるわけで、子供なんかぼくはもっと空気のいいところで勉強させたいし、既にリタイヤーした人にとっては、都市の持っている高度の文化性とかいうことはあまり意味をなさないで逆に非常な生活費の負担にもなってくるわけだし、といって家族制度はほとんど崩壊してしまっていて、子供は子供でアパートに住むという現状であって、都市は壮年を中心に考えて、それを補ってもっと弾力性のある、たとえば老人町だとかが出来ればよい。

外国では保険会社なんか相当興味を持っている。

それから、都市を集中的な文化現象なり生産現象を目的とする地域社会であるというふうに考えて進んでいくか、それとも都市というのはまだ大小を問わず全人間的な、一生を通しての生活の容器であるという形でいくかでもって、相当今後のとらえ方も変わってくる。いまのところ硬直性が強いために、そういうふうな二者選択というような状態でないわけですよ。何だか知らないけれども来て押し込まれて不愉快だけれども住んでいるという感じが或る年齢層には強い。これは年齢層という点で断面を切ったわけですが、ある種の職業にとってはこれは意味のないところかもしれないし、いろいろな切り方があると思うのです。

田村（明）　いま槇さんのいう、ある年齢階層に適したような都市になるだろうということは、効率論からみて確かにそうだと思うのです。たとえば市街地住宅の問題でも、もし典型的な二世代家族が住んだら、当然学校も要る。学校の敷地はかりに二ヘクタール要るとする。普通のニュータウンでやれば、二ヘクタールというのは六千坪ですから、たとえば坪一万円という土地だとすれば、小学校の土地代が六千万円、建物を入れても二億円以下です。それを都市の中でそういうことをやったら、おそらく坪十万円ではきかない。

たとえばぼくらのやった再開発計画の市街地では坪二十万円でしょう。そこに二ヘクタールの小学校用地をとるということは、土地だけで十二億です。そうすると土地だけで普通の小学校の土地、建物が六つ以上できるくらい非常にぜいたくなことになる。しかもまわりがビルに取りかこまれて、排気ガスも入り公害もあり環境は悪い。だからもしバリュー・アナリシスというふうな計算をやってみたらおそらく都市部と郊外部の小学校は十倍以上も効率が悪くなると思うのです。だから効率の問題から考えると、ビジネスを中心とした人たちのための施設はできるだけ充実するけれども、それ以外の施設はできるだけほかのところへ置くというふうなことにならざるを得ないと思うのです。

効率論では割り切れぬ

ただ、機械的な効率論からいくとそうなんだけれども、たとえば、何十年もの間都市で働いて一応社会生活を終わったというふうな人で、老人ホームが遠隔地にあってそこへほっぽり出せばいいかというと、やはりそうはいかない。アメリカなんかでやっている老人ホームも、例を聞きますとあまり田舎でやっているのは失敗らしい。だからある程度町に近いところで、老人はやはり社会経験も豊富だし、ある程度町に近くないとどうも満足しない。だからそういう人達も都市に取り込まなければいかん。そこが効率論だけでも割り切れないわけですね。

槇　効率からいうと都市は悪いですね。これからの都市社会では全人口の八〇％を占めるというが、それだけの汚水処理の問題を一つとってみても、なぜお互いが苦しみ合って、ガマンしながら住まなきゃならないか。もっと容易に住める場所があって、そこへ適当に人間がいれば、それに対するオーバー・ヘッド・コストは非常に少なくて済む。そういった計算というか、八〇％住んだときにどうなるかの効率の問題ですね。それでも都市化を進めた方が確かに国民の総生産が上がって効率の悪さをカバーし、なおかつ余りを八〇％にわけてくれるのか、というところの読みが何だかはっきりしていないような気がするのですがね。

田村（喜）　いまの効率論とかエコノミックな機能を都市において十分に発展させようとして、年寄と子どもは

槇　文彦氏

どこかへやれということになると、都市のリタイヤーも決して出身地が長野県だといっても長野県へは帰らない、大都市周辺の結局三〇キロから五〇キロ圏内のどこかに落ちつくだろうという気がするのです。そうするとそこがきわめて非能率化して一つの養老院みたいな形が出てくる。

田村（明）　ところが、三〇キロ圏から四〇キロ圏がいま盛んに都市化されている地帯なんですよ。そこへそういうものがはりついたところにすぐ追いかけて、次の都市の拡大が追っかぶせてくる。そのように日本の都市は非常に非能率なものをかかえながらゴミのついた雪だるま的に都市がつくられる。

Ⅱ　都市発展のパターン

都市化の実態はどのようにすすめられているのであろうか。都市のスムーズな発展を阻害しているのは何故だろうか、これをうちやぶってゆく戦略論を考える。

浅田　だから都市を横断的にとると、一番大事な壮年の町であるべき都心の住居地域は都市文化の中でリタイヤーした連中が住んでいるわけです。それがもう一つ外側へ行くとあまり都市経済の主流とは関係のないような連中が、とにかく代々そこへ住んでおったというようなことで家も持っておる、その外側に戦前から都市経済に参加したというような連中が、息子を育てながらホワイトカラー族として住んでいるわけだね。そのもう一つ外側にいくと、戦後のホワイトカラー族であるとかが住んでいる。そういう実情だろうね。

槇　これからどんどん都市人口が自然増加と流入によってふえてきたときに、いまいったパターンみたいなものがどんなふうになるか。やはり直径がどんどん大きくなって、あまりその間の入れかわりはなくて、次第にメガロポリス的に広がっていくのだろうか。

浅田　極端にいうと都市近郊問題は、近郊農村がどういうビヘイビアに出るかという問題と、それを攻撃する側にあるホワイトカラー、ブルーカラーがどういう態勢でもって攻撃していくかという戦争の場でしょう。

槇　結局そういった形のメガロポリスというのは多核都市じゃないんですよ。やはり一核都市なんですね。だけれどもぼくはやはり効率からいえば多核都市のほうがそのくらいの大きさのときは当然の形だけれども、一核から多核へ変わっていくだけのポテンシャルが、現在の行政を見ているとあまりないのではないかと思うのです。

浅田　ない最大の原因は、チャンネル・インダストリーの貧困だろうね。ヨーロッパやアメリカの経済に対して、チャンネル・インダストリーが整備されているのは、結局そこがマクロ経済的にいえば経済流通部門なんだというけれども、流通部門の生産性がものすごく低くて、日本の社会体制のまずさや、政治の貧困や、経済の忙しさなんというものは全部そこで引き受けているかっこうになっているから、ほんとうは流通部門のほうが生々と能率一点ばりで発展すればもっと整理されるのだけれども、整理されないために一番地域社会の環境が整備されないというのが実際のところですね。

槇　チャンネル・インダストリーというよりもむしろインダストリー相互間の体系的な依存度の強さがやはり一核都市を形成している。多核都市にいくことはもっと相互に弾力性のある、相互依存みたいなものがあって、一方的依存度が少ない産業組織か何かにしない限り、なかなかそういったものがうまく変わっていかないような気がするのですがね。

濃密経済を前提の計画を

浅田　たとえば従来の中小企業団地なんというのは完全な下請型でしょう。ここはメッキについてはこれが得意である、ここはダイキャストについてはこれが得意であるからといって、ダイキャストはどこかの親工場だけの下請をやっているなんというのじゃなくて、縦横無尽にやればいいわけなのだけれども、それをアレンジする産業社会における演出家としてのチャンネル・インダストリーが育っていない。そのために役所が幾ら団地をつくることに熱中したってだれも来ないわけだ。結局大企業が自分で自分の足元をすくう経済に日本の経済を追い込んでいる。それがまた日本の経済文化の硬直性だ。

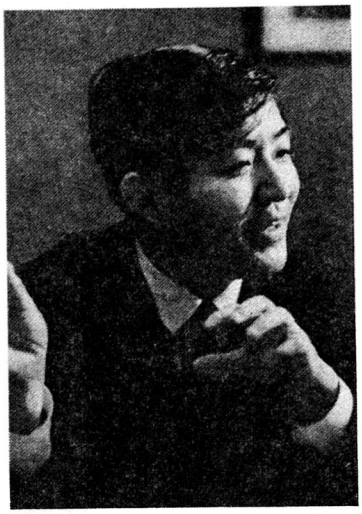
だから、日本独特の濃密経済、つまり面積あたりのGNPで見ると日本は各国に比べてものすごく高いですよ、それをまず前提においてナショナル・プランニングをやらなければいけない。そうじゃなくて、ただ末端での比較趨勢論でパターンナイズして事を理解しておっては日本列島はどうしようもない。

田村（喜）　そういう戦略的政治論である人が実はいない。これをこういうふうに押していけばこうなるから、こう選挙演説をやっておるわけですね。そうじゃなくて、いま少し複雑な戦略的いう意味では生活の環境が都市的なところでやっているか、自然を相手にし

もない。

田村（喜）　そういう戦略的政治論というのか、参謀本部みたいなものが日本は現在硬直しておるから、どういうようにもっていったらどうなるかという、戦略論をいま少し追い詰めなければならぬと思うのです。そういうものの不足をいま浅田さんが指摘されたと思うのですけれども、日本の現在の文化は視聴率文化じゃないか。テレビをぼかんと見ておって、要するに視聴率の高いものは編集者も編集するし、見るほうはただいいとか悪いとか直感的な判断で見ておるから、何か一つの小さなサークルになって、それに該当しないものはタレントとしても登場させないし、そういうような形で文化を構成しておる。

こういう媒体を戦略的に使っていくようなことを政治家は考えなければいかんと思うのだけれども、どういうように考えたらいいかということを教える人が実はいない。これをこういうふうに押していけばこうなるから、こうしろという戦略家がいないというか、戦略論がない。直線を伸ばしていってああなるというようなものをぽかんとして見ておる。政治家のほうもなるほどそれはおもしろいなというようなことくらいで、こうなるぞというような選挙演説をやっておるわけですね。そうじゃなくて、いま少し複雑な戦略的な政治論をやはり展開していくための準備機構というのか、統合参謀本部みたいなものがあっていいと思うんだけれども、そういうのがなかなか受け入れられないような一つのメカニズムができている。



田村　明氏

Ⅲ　都市と農村と自然

都市化が激しくなれば、都市と農村は両者とも今のままではありえない。激しい再編成をせまられることになるだろう。ここでは、都市、農村という区分が正確であるかどうかも疑問である。

浅田　日本のいまの経済全般を考えていくと、やはりこれからの都市社会のありようをきめていくプロセスで、いまの農村対策なり農業問題に対するナショナル・プランニングのアプローチのしかたによって非常に変わるだろうと思う。それとのうらはらなところでもって都市対策が進められていくという感じがする。

都市と農村の平和共存なのか、バランスは違いながらも都市と農村の平和共存型の中で流動し、流動したあげくのはてに農村でも財力を都市に対抗して持てるだけのものを農業法人として出す。たとえば三井東北農業株式会社なんというのが、資本金千億くらいで膨大な東北地方の三分の一くらい持っていて、ものすごい産業をやっているというようなのも適当にあって、八分二分くらいのオーダーで平和共存的にいっていて、そういう理想的な環境の農村に対して、都市のリタイヤーしたやつが金をかかえていって老後を送る、ゆうゆう自適するといったような時代なのか、それともこっちはゼロになって、賃加工国家経済即賃加工都市経済というかっこうで人口がまたさらに千万人くらいふえ、一億総サラリーマンというタイプでいくのか、その辺の見通しはどうですか。

合理主義の洗礼を受けて

田村（明）　農村であってもサラリーマンになるのじゃないですか。そういう意味では生活の環境が都市的なところでやっているか、自然を相手にしてやっているかというくらいの違いで、かなり均一化してくる方向なんじゃないでしょうか。二十年というふうに限定されると困りますけれども、方向としてはそういくのじゃなかろうか。それがいかないというのは、いま米価問題なんかでも出ているように、やはり農村社会でも都市の問題でもほんとうの意味の経済的な合理性が貫かれていないからです。そういう状態にいる限りやはり再編成はあり得ないわけなのだから、やはり全体的に合理主義の洗礼を都市も農村も受けるべきだ。

そういう洗礼を全部が受けないと、いままである既存のものを下敷に考えるという形式しかあり得ないから、一べん全部たがをはずしてしまう。そのたがをはずしてしまう力や基準は何であるか、第一には暴力、権力であるという行き方があるわけですけれども、第二には効率論でいう合理性というので考えてみても、相当再編成が進むのではないかというふうな感じがするのですけれどもね。いまの体制からいったら前者のほうをとるわけにいかないわけですから、後者のほうをとっていくというふうなことになるのじゃないか。

川添　それはぼくも基本的に賛成なんだけれども、農村のほうの合理性を

貫いていく都市化みたいな、いまでもすごいですよ。そういうのもますます拍車をかけるでしょう。受け入れ態勢が何もないところにいきなり、そういう合理性を持ってきていいかどうかということもね。

浅田　本来相反した経済であり、さらに生活の精神的面まで含めて全然違うタイプなんですね、パターンとして。人間の生活する環境というので総合的にみて、それが平和共存できるのか、根本的にできないのか……。

槇　できないことはないので、やらざるを得ないでしょう。それを非常な不満を持ってやるか、喜々としてやるか、その辺の差だと思うのですね。

浅田　二十年、三十年くらいをとってこうなる型でいってしまえば、まず問題なしに日本の経済は都市経済になっていくだろうということだね。その中のエリートが巨大なる農業法人の支配者としてゆうゆう自適して、都市から功なり名をとげた安倍能成なんというようなものを校長さんに迎えて、自分の息子のために学校をつくって、自家用飛行機も持って、ときには銀座でロードショーでも見てやるかというような生活をしておるだろうということになるわけだね。ぼくらどっちかというと、そっちのほうへ卦を立てるね。それは一方でいえば人口関係と精神面の問題であり、やはり自然淘汰の巨大な恵を十分スピリチュアルに吸収し尽くしている人間が、ずっと瑞々しさを持っておるだろうと思うんだな。

田村喜照氏

三つの輪が一つになって

槇　生活環境という形で、都市環境が全人口の八〇%くらい、それから農村環境があるのですが、おそらくこれからの世界で非常に重要になってくるのは、それプラス自然環境だと思うのです。そこで特に農業をするわけでもないし、そこで生産が行なわれるわけでもない、やはりその三つの輪くらいが一になっているという感じだと思うのです。自然環境というのは公的なもので保護され、あるいは育成される部分もあると思いますし、それからわりあいと数では少ないかもしれないけれども、先ほどの功なり名をとげた都市生活のあとのほう、そういう自然環境を何らかの形で中に入り込んで住んでいくという形もあり得るしね。

必ずしも都市生活からのリタイアメントが近郊であるとか、農村への還元じゃなしに、全く違った自然環境への新しい定着という形で、これはニューヨークあたりでリタイヤーした人がハワイへずいぶん行く、それからアリゾナでまたしろうと農業を始める、趣味としての自然に対する生活への定着というのがある。だから日本の場合に三つでもって一つだという考え方が成立するかしないかということは、環境に対するこれからの開発とか保全とかいう場合に相当考えていいのじゃないかという気がする。

Ⅳ　都市の育てる人　農村の育てる人

都市は果して将来の人類のにない手である人間の能力を開発する場として充分の役割を果すだろうか。この問題は今後の人類の進歩を占うものである。

浅田　話題を提供する意味でいうと、なぜ農村のほうに将来日本列島の指導者となるであろう人間の培養地として合わせざるを得ないかというと、たとえばサイエンスなり、技術なりというのを自分のサーバントとして使いこなすというタクティックからいうといまの農家の一つの家庭に入っている原動機の馬力数で見ると、ずっと農村の子弟のほうが、ヤンマーを動かしたり、ジーゼルを動かしたり、内燃機関を取り扱ったり、メカニックなものを取り扱っている経験を持っている。都市のやつはどっちかというと使いつぶして身をすり減らす、かせぎをすり減らす、そういうかっこうになっているわけです。都市生活の実態はそういうサイエンスとの関係、技術との関係に問題があるので、この悪循環をどうかしなければいけないのか、それでいいのか、どうですかね。

日本列島を三枚におろし

田村（喜）　いま都市と農村という分け方をしたけれども、ぼくは国土開発屋だから、毎日日本列島をながめているのだけれども、どうも都市と農村という対比のしかたで考えないほうがいいのではないかという感じがしているのです。これはまだぼく自身がまとめていないからよくわからぬが、日本列島を三分割して考えるべきじゃないか。一つは太平洋岸に面しているところと、つぎには山岳地帯、北海道から鹿児島まで一本に通して、山脈のまん中の部分が一つだろう。それから日本海側の文化がやはりある。こういうふうに三つがかなり異質性を持ったものとして、今後も考えていっていいのではないかという気がするのです。

に置くと、北からいうと札幌にせよ、仙台にせよ、名古屋にせよ、広島にせ

農民ではなく、工業労働者もおるわけですよ。だから農業だって工業労働と

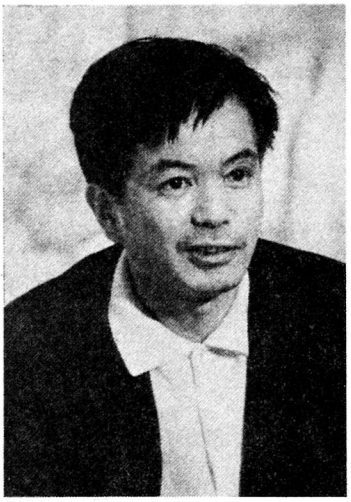
と天才になれない。だから天才ができるというのは確率の問題なんですよ。

として、今後も考えていっていいのではないかという気がするのです。

そこで都市と農村という場合の農村は一体どこをさしているのか。農山漁村までさしているのか、逆に都市のほうも裏日本の都市も考えているのかどうか。そうすると太平洋岸の都市と日本海側の都市は性格がある程度違うだろう。それから山脈の中にもぽつんぽつんとある都市もやはり違うだろう。だからむしろ日本列島が置かれた宿命をある程度頭において、都市問題を考えるべきではないか。そこのところに何かやはり日本の場合は農村と都市という対比のしかただけではもの足りないものがある、という感じがしてしようがないんですよ。

浅田　田村君は日本列島を三枚におろして、サシミになるほうだけでは問題があるということなんですよ。その問題は専門的にいうと別に論議があるけれども、ここは一応都市社会を前提に置くと、北からいうと札幌にせよ、仙台にせよ、名古屋にせよ、広島にせよ、ほぼ太平洋側ということなんですね。そこでの都市型として新産都市とかいっているけれども、自然のエネルギー関係との共存、利用を考えると、工業生産の主力の配置も結局は太平洋沿岸にならざるを得ないだろうし、そうなれば雇用機会がそうであるからして、生活基盤もそっちにしなければというようなことの前提論もあるわけですね。

その中で東京湾と大阪湾を鉄亜鈴の両端として結んだような形が一そう抜きん出た主力的な都市、それを主軸としてかなりの人間がそこに住む、だからそこでの生活なりマーケットとして見た場合、大量生産、大量流通、大量消費というような、そういう都市型の生活環境である。しかもタイプとしては大衆社会であるということにしていいんでしょうね。したがって大量生産、大量流通、大量消費というような最もはしたない経済のタイプをとるわけだな。



川添　登氏

川添　はしたないかどうか問題だな。（笑）浅田さんに反対するとすれば、さっきの農民の若い連中のほうが機械を動かしているということですね。それは農民ではなく、工業労働者もおるわけですよ。だから農業だって工業労働と同じようなことになっていく。だけれども、マルクスなんか言っているようですが、労働過程というのは本質的に人間的個人の対象なんですね。社会形態にかかわりなく、それが流通過程に入ることによって社会的な生産過程に入る。だから人間というのはあくまでも社会的な生物であって、それだったら動物よりちょっと手練手管がうまくなったにすぎない。そういうことを言うなら、むしろ人間がこれだけ成長してきたのは何といったってコミュニケーションの結果であって、労働の結果じゃない。自然との関係じゃなくて、社会的な環境でなってきた。都市が文明を生み出したというのは商業が都市のコミュニケーションで成り立っているということですね。

社会的な環境の重大性

それから、たとえば人間というのは、音楽家になるのは七才くらいのときに音楽家の才能が開発されなければだめだ、数学だって十何才、哲学だって三十才までとか。またいまの音楽家にしたって十七くらいの才能のコンビネーションがなければならない。目で楽譜を読む能力とか、バイオリンのからだを動かす能力とか、作曲の構成を考える能力とか、そういうのがある年齢のときに的確に開発されていかないと天才になれない。だから天才ができるというのは確率の問題なんですよ。ベートーベンは百年に一ぺんしか出ない。ああいう才能の組み合わせがその年齢のときに的確に与えられる確率は都市の方が高い。現在でもＩＱを調べたら、農村の児童と都会の児童とでは、農村児童へプラス・アルファしないとだめなんですね。

けれども、まだ人間の脳細胞は半分くらいしか使われていないんだから、そういうのを開発するのはコミュニケーションがいろいろなところにあって、適当な時期に適当な才能に対して刺激が与えられるような条件がある都市だろうと思いますね。

田村（喜）　川添さんの論拠と全く別のことを言うならば、日本では鎌倉時代あたりが一つの新しい宗教というか、思想の母体になった。そういうものの開祖というか、開山というかは、山を開いてやったわけだ。それが大体八〇〇メートルから一、〇〇〇メートルくらいの山を買い切ってここに人を集めてやった。そうするとその辺が寒からず熱からず精神的にクリヤーになって、スピリチュアルになるんだな。だからそういうような意味では天才はいろいろなコミュニケーションの中から生まれるというけれども、そういうものもある反面、また山の中で瞑想して国家百年の大計を考えるとか、大きな思想を考え出すということも必要

だと思う。

槇　確かにそうした人間能力の開発というものはおもしろいと思うのですが、能力の開発された結果の対比が農村対都市という形の次元で問題になるのじゃなくて、海外対日本という形で能力が問題になってくるほうがはるかに重大なことだし、これからの都市化の最終的なグロス・ナショナル・プロダクトの増大性と結びつくのだと思うのですよ。端的にいって現在の産業基盤に立って、これからの国際金融とか、経済情勢の中での日本の伸びを見ますと、確かに所得はある程度倍増するかもしれないけれども、それが環境形成のためのいわゆる外部経済形成のためにおろされていく比率は、そんなに多くないのではないかという感じがする。

そうするとそれが急速に八〇％が集まることによってくる膨大な社会資本に対する要求、たとえば下水にしろ、都市施設にしろ、道路にしろ、土地造成にしろ、あるいは教育その他病院施設にしろ、何となしに所得は多くなったけれども、何だか住みにくいという状態がこのままではきてしまうのではないかということは、二十年くらい先を見てみるとかなりいえそうだ。それに対してグロス・ナショナル・プロダクトのより大きな増加という形と、それからその中での分配の二つによって、あるいはその組み合わせで大体よりよい方向ができるかもしれないということがまずあると思うのです。

知識産業の将来に期待

最初のほうのグロス・ナショナル・プロダクトの増加という形の中で従来の産業組織の中で国際競争をやることには、相当シビアな問題があるけれども、能力を開発した結果がその一部にもっている知識産業というのは、かなり新しい産業として注目されてきている。そういったものは相当期待がかけられるのではないかと思うのです。

川添　それと日本のソシアル・プランニングからいえば文化論だということです。労働というのは全く個人的なものだといったんですが、たとえばモダンデザインが起こってくるのはどういうことかというと、産業革命でモダンデザインは起こってこないんですね。それから大衆消費社会になって流通経済に入ってくると、デザイナーが職業として成り立ってくるのですね。そのことによって労働過程がコミュニケーション過程に組み入れられてくる。ところが建築家というのは古代からデザイナーがいるのです。ということはその点がマルクスや何かも気がつかないところなのだけれども、古代から建築の労働は個人単位のものじゃない。社会的な労働なんです。だから古代都市や何か一方では商業でもって農村や何かを収奪している。もう一つはなぜ古代にあれだけ建設をやってこなければいけないかとか、それで労働力として組織していくわけですね。そういうのが文明というものなんだ。

ところが日本の建築はそういう伝統がないのです。奈良時代ちょっとあっただけで、みんな代謝型なのです。どんどん代謝して一方では拡散していくという型で、要するに大きな公共のものを建設するというようなものがあまりないんです。たとえば江戸城の建設なんかあったけれども、そういうのは日本文化としてあまり文化人や何かに喜ばれないようなタイプなんだ。日本の最も代謝的な桂離宮だとか、住宅とかいうのを非常に高く評価したのはだれかというと、モダンデザインの先駆者たちによって発見されたわけです。ということは現在の社会がいわゆる機能社会で拡散型へどんどん行って、エネルギー代謝的なフローであってストックのほうじゃない。

そのためにはそういう蓄積していくもう一つ経済理論とは別な、ぼくは文明理論といっているのですが、そういう建築工事みたいなことで、環境をつくることによって社会を組織していく方法論がなくてはいけないんだ。方法論というか、戦略がなくてはいけない。それが日本だけじゃなくて世界じゅうどこもないのですよ。現在文明というのはどんどん拡散化されている。それで特に日本の場合に悲観的だというのは、ヨーロッパの場合には近代的な方法論としてはないけれども、伝統的にあるわけです。だからそういうような社会制度は高度成長にはもってこいの能率がいいのでやってきたわけですね。

V　都市開発の具体化へ

爆発的に集中する都市化の現象に対して、これを具体化してゆくだけの能力を一体そなえているのだろうか。どこかで矛盾が爆発するのではないだろうか。そのような情勢には一体どのような対応の仕方があるのだろう。

田村（喜）　槇さんの先ほどの発想でおもしろいと思っているし、皆さんにお聞きしたいのは、東海道メガロポリスに八〇％が集まって収容する能力が一体あるかしら。また収容する能力をこれからつくる知恵というか、政策というか、資金というか、そういうものを導入するテクニックがじょうずにいくかどうか疑問があるような気がしてしようがないんだ。というのは年々公共投資をうんとやらなければならないでしょう。都市にもかなりばく大な金をそそがなければならないけれども、なかなかそれができない。制約条件がかなりある。

あるわけです。そこでプランナーという何か部材が与えられた組み立て屋というのは外へ立地して船で運ぶほう

件がかなりある。

もしそれがかなり公共投資がおくれて、人口集中がどうしてもさらに激しくなってきたら、そのギャップから何か暴動が起きるか、それとも外へ出ていくか、もう一つは農山村へリタイヤーするという三つの運動しかないと思うのだけれども、そのときに一体どっちの方向をとるか。少なくとも激しい二十年間を単純にいままでのものを引っぱっていくと考えられないので、むしろそういう連続的な歴史観じゃなくて、そこに断絶するような非連続的な歴史観がどうしてもぽかんとどこかで落ちるのじゃないか。これは二十年というタイムビジョンで見るとね。

"仕分け屋"よ出でよ

田村（明） どうしても都市は雪だるま的に異物をかかえたままの成長ではなく、再編成が行なわれなければ、これだけの絶対的な量の増大はこなせない。面積的には一応納まる計算が出ますが、資金的にも国家財政の伸びを引き伸ばして、それから公共投資をどのくらいの割合ということで計算していけばこれも何とかなると思うのです。ただ実際は面積はある、資本も一応はあるというふうなかっこうでも、それがどういうふうに具体的に結びつくか、資本が土地におろされるとき都市は相当の再編成を迫られるが、そこがうまくゆかないという危険性が非常にあるわけです。そこでプランナーという物的なほうのフィジカル・プランナーもいるのだけれども、むしろ仕分け師ともいう連中が多数いろいろなところに入り込んで、物と金と人をうまくくっつけるような仕分けをして整理をしてしまう。

これはどういうかっこうで出てくるかというと、一つは強権でやるというのがあるわけです。強権論は感心しない。そういう連中が職業として十分成り立って、十分ペイして、それで利得がある、ある程度の生活ができるというふうな、そういう仕組が一つ出てくれば、その連中が自然に多数輩出してくるのじゃないか。やはりその人々に期待しないとどうもいまのままでは混沌の町になる。量だけを膨大に増大していく、引き伸ばしていくというのは、数字でははじけるけれども、実態にはおりてこない。その実態におろす仕分け屋がどうしても要る。

川添 やはり機能主義的な行き方で、仕分け屋じゃなくて組み立て屋だろうと思うんだな。そういういい方をしたほうがいいような気がする。

槇 組み立て屋というのはオルガナイザーでも仕分け屋でもなくて、オルガナイザーはオルガナイズしていく、組み立て屋というのは、昔の古代都市だったらばかでかいのをつくったようなのが組み立て屋という……。

田村（明） 組み立て屋というのは何か部材が与えられた組み立て屋という意味だとちょっとまずくて、部材自体を現状からはがしてきてやらないといけないと思うのです。

槇 先ほどの爆発的な危険というのは確かにあると思うのですが、ところがいきなり爆発的に都市が八〇%の人口になるのじゃなくて、漸進的に八〇%にくる段階で脱皮が行なわれていくだけの余裕があるし、アジャストメントの期間があるでしょう。

田村（喜） 過程において問題になるのは、いまの政治形体を見るとやはり選挙でしょう。頭割りの各地域別の選挙をしていますから、都市がたとえば膨大な人間をつくっても代議士の頭数では、人口がほとんどいないところの農村と大差ないわけでしょう。そういう政治形体をとるからどうしても建設大臣とか、大蔵大臣になる人は大都市の中から出てこないで、農山村の連中がなる比率が多いわけだ。そうするとどうしても公共投資が当面必要な集中化のほうへ流れないで、とんでもない方向へ流れていって、そういう方面に政治としてはむだな投資が行なわれる。そうして都市では投資が行なわれない。そういう形態がやはり続くと思うんだ。

そうしたら、人口集中部でどうしても爆発が起きるじゃないか。爆発が起きるか、もしくはこれが外へ出ていく。鉄工業とか、石油化学工業なんというものは外へ立地して船で運ぶほうが経済の合理性を貫くようになる、すると大企業は逃げていきやせんか。都市人口八〇%というのは集合する前夜あたりまでに爆発を起こすか、外へ出ていくか、農山村はリタイヤーして山の中へ行っていい空気を吸うけれども、これは少ないから問題でないと思うんだ。この二つの現象のどっちが起きるか。

槇 それ以外はないんですか。

田村（喜） それ以外あったら教えてもらいたいんですよ。

浅田 逆にいうと爆発的であるほどのプレッシャーがマーケットにかかってくること自体が、非常に日本のデモクラシーというよりはポリクラシーといういい方をしたほうがいいと思うのだけれども、ポリクラティックな日本の政治機構なり社会制度なりというものを前提にして動いている産業社会の連中にとってはうまいマーケットになる。つまり技術的には問題ない、土地のほうもいってしまいますよ。一億くらいは狭いところに収容するくらいはわけない。

だけれども一番問題になるのは、連中がどうやってそこそこの所得三倍増くらいなところで、GNP十年たって百兆くらいな経済の中であくせく暮したあげくのはて、何をしたいんですかとぼくは聞きたいわけだ。それであなた何をするのと聞いたときに索漠とし

た顔をするんだな。いろいろな企業の社長さんに聞いても、索漠とした顔をしておるよ。人生の終わりみたいな顔をしている。

貧困度をはかる新尺度を

川添　頭割りだけの問題ではないんですよ。たとえば東京都から税金をたくさん吸い上げて、東京都におろさないのは、代議士の関係だけではなくて、東京は富裕都市だということなんだ。だから貧乏のほうに富裕都市からやらなければいけないという考え方があるわけね。

ところがエネルギー代謝、経済的から見れば確かに東京は富裕都市なんだけれども、中央線の中でこんな交通地獄になるとか、そういう問題を入れてみれば、いかに東京の人間は虐待されていることか。一番貧困な人間が集まっているわけですね。そういう貧困度をはかる尺度がなければだめなんですよ。

田村（喜）　いままでのはかり方ではいかない。ところが少なくとも将来にわたってのデシジョンメーカーの行動は、東京の人間はやはり富裕だという観点のもとに、いなかの人はかわいそうだからといって出すと思うんだ。そういうものの考え方をしていくと、東京自身がパンクするだろう。

田村（明）　しかしそれにもかかわらず効用と非効用の和がプラスに出てくるから集中してくるんでしょう。現在の都市集中現象はマイナスもあるけれども、プラス効用が一そう大きいということです。

それでさっきの話に戻るけれども、地方への投資、確かに公共投資は地方が大きいわけです。坂本二郎さんの書いている図式によると、公共投資は地方へ流れる、地方ではそれを何に使うかというと教育投資に使う、ここで教育したのが大都市に集る。民間投資は大都市集中で、地方には流れない、ここでその連中が働いて民間資本がそれでふとるというふうな図式を書いているんですよ。ぼくはそれでいいんじゃないかと思うのです。

全人間的な教育ということを言うと、やはり農村の教育は強いと思うんですよ。都市に育っている人間は、運動場も小さいし、一面的な紙の上の教育しか受けないし、人間的な幅はどうしたって自然のほうで養われるにきまっている。特殊な作曲家とかなんとかというのは別だけれども、やはりある時期までは農村で生活して、ある時期に東京へ来て勉強しているのが一番強いですよ。リタイヤーしたらまた自然へ帰る。

坂本さんの図式でいう資本的な還元もやはりそれを裏づけていると思うんですよ。公共投資をする、それで教育をする、ある程度以上くるとこっちへ来て高等教育を受ける。そこで民間資本をそこへ投入して、拡大再生産の過程をとっていくというふうな、資本的にも人間的にもその過程をとって、それは合理的なのだと思うのだけれども、そこでなおかつ問題なのは、それでは大都市に公共投資が不足してみんな地方へ流れているじゃないかということだけれども、その循環の過程の最後に果実を刈りとっているのは何かというと、私的資本なんですよ。それが不足の公共投資にそれだけの分を増加部分から投下しないということが問題なんだ。

循環過程の果実はどこへ

そこで出すものも出す、もうけるものももうけるというふうなところの仕組が一本抜けているのじゃないか。それでいけばいまのサイクルは完結するし、槇さんが初め言ったようなある年齢、年齢に応じたようなある行動タイプがあるわけだから、それに基づいて人間が動いて適当なところにいって青壮年を中心に都市が形成され、最後は自然に帰るという形は可能だと思うのだけれども、最も肝心な大都市のところでパイプが詰まって、大企業が刈るものだけは刈りとって後はボイということが一番まずいのじゃないか。

田村（喜）　そういう論法でいくと、先ほどから議論している都市のリタイヤーをどこかへ抜かないと下から入ってくるからパンクしちゃうんだ。それじゃ抜けばいいということだな。抜くのを一体どこへ抜くかという問題がある。

それをさっきから議論しているのだけれども、ぼくは三〇キロから五〇キロ圏に抜けそうだから、そうするとドーナツ型にふくらむ。さらに悪いのは都市の中での少し小金をためた連中が、ここへセカンドハウスをつくるだろう。そうするとここがえらい混んじゃうじゃないか。

川添　五〇キロ圏で三千万くらいだったら十分じゃないですか。

Ⅵ　新しい人間づくりの時代

都市文明は人類文明の一つの定型であろう。しかし都市文明は人類に本当の幸をもたらしたのだろうか。ここではあらためて、教育の問題、文明の基盤にある人間自体の生き方が問題としてとりあげられる。

浅田　いまはむしろ五〇キロ圏はリタイヤー場所どころか、ほんとうに産業界の第一線で働くものが住む場所にならざるを得なくなっているわけですよ。最大の問題は教育なんですよ。

教育の問題をこのはしたなく成立した大衆社会、都市社会で次のゼネレーションをどう育てるつもりかということを彼らに聞きたいな。

うにやはり寂漠らしいですね。

近代的な仕分け屋がね。それでやはって実は先回りしてかくかくたる将来を

とを彼らに聞きたいな。

ほんとうだったら駅弁大学なんというような調子のやつは、職業大学として山手線の駅ごとにあって、ほんとうの大学はちゃんと信州とか北海道とか、九州の山の中とか、阿蘇山なんていいと思うけれどもね。

田村（喜）　先生が行くかな。なかなかそうはならぬのじゃないかな。

浅田　それは簡単なんで、国民所得の相当部分を教育に回すことをきめれば、いまの大学教師の給料を二十倍にしてあげれば、一発で解決するんだ。だから仕分け屋がまず出て、そういうのをやって組み立てができればいいくだろう。

田村（喜）　ぼくが一番心配するのは、政治のデシジョンはおそいし、それがなおかつ現実に動くのはかなりおそいから、よっぽど声の大きい人が言ってもなかなか動かない。十年くらいたってしまう。そうするとそこにやはり十年間の弊害が大きく累積されていくだろう。

槇　ここ十年が危機じゃないかな。かりにうまくいったと仮定するわけですよ。大体おさまって、社会資本の投下も行なわれて、それから老後のことも経済的に心配しなくてもいいという状態、スエーデンなんかそれに近いのですが、だからといってそれでは人生これ充実しているかというと、実はそうじゃなくて、浅田さんの言われたようにやはり寂漠らしいですね。

浅田　寂漠どころじゃない。地獄の苦しみだよ。

槇　目的が与えられて、それに向かって何とか定年まで金をためて何かをつくろうなんという楽しみもずっとなくなってきたし、いろいろなものがいなくなって、逆に与えられているという状態はいいかもしれないけれども、やはり目的はそういったことでは充足されないとすると、文明論に帰ってきて、都市文明が経済以外のことにプラス何かそこに一つの目的を与えるだけの環境になり得るかどうか、というところのレベルの問題がずいぶんあるね。

最大の問題は教育問題

浅田　その問題の最大は教育問題だと思う。幼年期教育、少年期教育が都市文明の在来の歴史上に成立した諸文明に比べての一番弱点なのです。一番恥部なのだから、その恥部についてさえちゃんとしておくという決心さえすれば、スエーデン型のようなほうへいくことはない。

それははるかに通りこした高水準での問題のありようだから、あとは教育のことさえ心配なければいい。政治家が仕分け屋なんだから、政治家あたりがそのビジョンを持ってもらいたいし、少なくとも戦略が読めるという仕分け屋が出てこなければいけない。近代的な仕分け屋がね。それでやはりもっとすぐれた戦略家を地域問題については多数導入しなければいけないんじゃないかな。

田村（明）　教育問題でいえば、さっきの都市と農村のサイクルを積極的に活用するのだったら、ある程度親を離れていい年令になったら、その子供達は農村と自然の中にすばらしい学校があって、そこで全寮制の教育を受けるというようになれば、都市、農村、自然はそれぞれ能率的に役割を果すことになる。

槇　だれが教育するか問題だ。新しい時代におけるそうした新しい教育者ができつつあるのですか。要求は非常に生まれつつあるけれども。

浅田　ほっておいても高校あたりでどんどん生徒数が減りますから、山は通り過ぎているのですけれども、特に地方都市のそういう連中を全寮制にして活用するとか、あるいは地域社会の中での成人学校的なものを経営するとか、だんだんいくとは思うのです。

ただ、そのしんになるフィロソフィーを仕分け屋である政治家が勉強をしていないからね。それで困るんですよ。地域問題というのは拡大時における指導よりも、むしろ縮小期における指導が大事である、一国の経済についてもやはりそういうことなんです。

つまりしんがりを承る退却の戦略、エクスパンド戦略から退却戦略によって実は先回りしてかくかくたる将来を築いていくような、ソーシャル・ダイナミックスがわかる政治家が出てこなければだめなんですよ。

経営者にしてもそうなんだ。経済成長期にぼんぼん作業を拡大し、工場をどんどん建てるのは、馬鹿でもちょんでもやれますよ。ほんとうの経営者はそうじゃない。もう一段上がった将来社会の中での企業を安泰にさせるのは、経済退潮期におけるやりようで評価されるだろうね。

文化人は悲観論者

川添　どこの座談会でもそうそうたる文化人がみんな悲観論者だ。未来のことについて何も考えないね。現在的時点で悲観論だ。将来だって絶対よくならない。ぼくは一生懸命イメージを上げるほうだ。だけれども反省しちゃうね。

というのは、そういう実感のほうが正しいんですよ。とにかく物価高で困っているでしょう。佐藤内閣も困って、それで二十一世紀のビジョンか何かでごまかしているわけなんだよ。ぼくなんかごまかしの片棒かついでいるときがあるんで、非常に反省しているんですよ。

（終り）

＊　＊　＊